

# 労災遺族 生まない社会を

仕事中に交通事故や災害に巻き込まれるなど労働災害で家族を亡くした人が集まり、交流を深める取り組みが始まっている。同じ境遇の遺族らが語り合う中で、原因究明を担う機関の設置など「遺族にならない社会づくり」に向けた意見も出された。二度と大切な人を亡くす悲しみや悲劇を繰り返してほしくない。遺族らは取り組みを通じ、新たな一歩を踏み出そうとしている。（大渡美咲、写真も）

10月24日、東京都八王子市のホテルで、過労死や仕事上の事故などで夫や子供を亡くした遺族が集まり、「遺族懇談会」が開かれた。参加した15家族24人は3つのテーブルに分かれ、亡くなった家族や現在の思いなどを語り合った。

昨年2月、夫の賢二さん（当時53）を仕事上の事故で亡くした茨城県の飯島雅美さん（51）は、これまで事故に関



懇談会では家族への思いや原因究明などを求める声など、さまざまな意見が出た。10月、東京都八王子市



## 高尾みころも霊堂

労働災害で亡くなった人を追悼する施設として、昭和47年に建立された。厚生労働省所管の独立行政法人「労働者健康安全機構」が運営し、敷地内には拝殿や祭祀室などがある。10月現在、27万3423人がまつられ、毎年秋に慰霊式が行われる。慰霊式には、昭和時代は上皇、夫妻、平成では主に天皇、皇后両陛下が5年ごとにご臨席。令和4年には秋篠宮、夫妻が臨席された。

## 「話してもいいんだよ」当事者交流、救いに

（29）を亡くした熊本市の深迫祥子さん（55）だ。忍さんは、コーヒー豆を運ぶ際にバックしてきたトラックと壁の間に挟まれ亡くなった。忍さんの労災認定後、深迫さんは、同じように仕事中に亡くなった人が多くいることを知ったという。

交通事故や事件の遺族が集まる遺族会はあるが、労災遺族が集まる機会がないことに気づいた深迫さん。「遺族がつながる場を作り、『みころも霊堂』を多くの人に知ってもらいたい」と、懇談会をみころも霊堂側に提案した。

長時間労働やパワハラに苦しみ自殺した広告大手「電通」の新社員、高橋まつりさん（24）の母、幸美さん（60）は「普段誰にも話すことができないことを話すことができて、みなさん来てよかったとおっしゃっていた」と会を振り返った。

東日本大震災の津波で、七十七銀行女川支店の行員だった長男の田村健太さん（25）を失った父の孝行さん（63）は、懇談会の中で、労災遺族の相談窓口や原因究明を担う機関の必要性を訴える意見があったと明かした。孝行さんは「同じ悲劇を繰り返さないためにも、原因究明や改善を求めると同時に、遺族の心のケアも必要。労災遺族のための支援センターのようなものを作って発信してほしい」と提案。今後も家族同士の交流を深め、「遺族が声を上げないといけない社会から、誰も遺族にならないような社会を作っていきたい」と話した。